

渡辺利夫の グローバル随想

最終回 若者よ！“公”に目覚めよ



今回をもって私の「グローバル随想」は終わる。この1年間、つたないエッセイに付き合っただ下さった方々には深く御礼申し上げる。最後の今回は、一大学の学長として次代を担う若者を私がいかなる精神をもって育てようとしているかについて記させていただきたい。

私が拓殖大学の学長職に任じられて4年近くが経つ。私が教育しているのは日本の平均的な若者である。彼らを公に目覚めさせたい。奉職中、私の胸をつねに満たしていたのはその思いである。現代は「成熟の時代」といわれ「ポストモダン」と称される。響きは何とも麗しいが、実際には躍動感に乏しく混沌たる価値観の時代である。この現代を生きる若者たちに、今生きて在ることの晴れがましさを実感させたい。その実感こそが若者の成長の源泉になるはずだという思いが私から去ったことはない。たとえば今年の入学式の告辞で私は次のように語りかけた。

弱い立場の人のために行動せよ

「私的利益はこれをいくら追求しても、その向こうにあるのは小さな自己満足だけです。私的利益の追求だけでは、自分以外の何ものかのために生き、共同体や社会に献身することによって得ら

れる、心の底から湧き出るような幸せは得られません。“公”に生きようではないか。公に生きるとは、貧しき国々、虐げられし人々、弱い立場の人間のことに常に思いを寄せ、彼らのために行動するということです。経験してみればすぐに分かることですが、そうした思いと行動がわれわれをなぜか名状し難い誇りと幸福に導いてくれるのです。人間とはそのような存在として創られているのだとさえ私には思われるのです」。

私は学生にアジアの貧困国での現地体験を在学中に少なくとも一度はさせ、これを単位化することを試みてきた。現在の若者は生活に窮するということはまずない。それゆえであろう、何か世のためにやりたという気分は私どもの青春時代より強い。しかし何をやったらいいのか、この「暖衣飽食」の日本の中ではみえてこないのである。

フィリピンの信頼できる現地 NGO と組み、彼らの家にホームステイさせ、彼らの指導の下でストリートチルドレンの救済活動に参加させたり、スモーカーマウンテンと呼ばれる巨大なゴミの山で空き缶やビニール袋を拾って親の生計の糧にしている子どもたちが、麻薬など悪の道に迷い込まないように子ども会を組織し、その世話をさせる。そういった活動に1カ月ほど携わらせ帰国した彼らの顔には、自分以外のことに何かの貢献ができ

たのだという晴れがましさが浮かんでいる。

インドネシアの姉妹校と「協働」して、その姉妹校に隣接する貧困地域のコミュニティ・ディベロップメントに両校の教員と学生の参加を得て、自治会の組織づくりに精出させたりもした。このプロジェクトの中で日本の学生が姉妹校の学生からインドネシア語を学び、姉妹校の学生が日本の学生から日本語を学ぶという副産物も生まれた。このプロジェクトはJICA（日本国際協力機構）から「草の根技術協力事業」に取り上げられ、年間1000万円の支援を3年にわたって受けるという幸せに恵まれた。そういう仕事の中で、若者たちは「共生」にも目覚めるのであろう。私は同じ告辞の中でこうも語った。

「現在の日本では、個々の人間が個々に生き、共同体や社会とともに生きているという実感、つまり“共生感”が手ひどいほどに薄れています。人間がそれぞれ私的利益のみを追求し、共同体や社会の中に住まっているという共生感を失ってしまえば、残るのは自分という“個”のみです。他の誰をもあてにせず、信用もせず、愛することもなく生きる個とは実に不幸な存在です。自然生命体はすべて個ではなく、“群”の中で生きる存在です。人間もその例外ではありません。人間の本当の幸せは、誇りと並んで共生感にその源をもっているのです」。

危機に際しての指導者の生き方

しかし、若者を本当に公に目覚めさせ、晴れやかで誇らしい人生を送らせるためには、何よりも国家の指導者がそういう生き方をしなければならない。仮にも指導者が屈辱的で迎合的な生き方をしていたのでは、日本人を、日本の若者を公に目覚めさせることなどできるはずもない。私はこの5月に『新脱亜論』（文藝春秋）を上梓した。本書を書いた理由はさまざまだが、最大のテーマは危機に際しての指導者の生き方についてであっ

た。

現在の日本を取り巻く極東アジアの地政学的状況は、開国維新から日清・日露戦役開戦前夜のそれと酷似している。中国はもとより韓国、北朝鮮、そしてロシアまでが挑戦的外交をもって日本に臨んでいる。にもかかわらず、日本政府は集団的自衛権行使についての旧来の解釈を変えようという気概がない。インド洋での給油・給水支援活動の継続すらあやしく、PKO（国連平和維持軍）においてはG8（先進8カ国）だけでなく中国、韓国の後塵をも拝している。ODA（政府開発援助）の供与額はついに世界第5位にまで縮小してしまった。要するに現在の日本人の安全保障認識は何とも安穏なのである。ならば、開国維新から日清・日露戦役開戦前夜において日本の政治指導者やオピニオンリーダーが当時の緊迫の国際環境をいかに認識し、この認識に立っていかに果敢に行動したのかを記して、目下の日本の外交のありように対するアンチテーゼを突きつけてみたいと考えたのである。

日本の指導者よ、国を捨つるなかれ。日本の指導者よ、若者に屈辱を与えるような外交から脱せよ。そういう思いで私は『新脱亜論』を書いたのだが、思いもかけず版を重ねている。日本人の危機感が相当の深まりをみせていることの証なのであろうか。

執筆活動は今後とも続けて参ります。いずれかの紙上、または誌上でまたお目にかかれようように念じています。ありがとうございました。 ■

（わたなべ・としお）

1939年生まれ、慶応義塾大学卒、同大学院博士課程修了。経済学博士。開発経済学専攻。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て2005年から拓殖大学学長。外務大臣表彰。主著に『成長のアジア 停滞のアジア』（東洋経済新報社、吉野作造賞）、『開発経済学』（日本評論社、大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（文藝春秋、アジア太平洋賞・大賞）、『神経症の時代』（TBSブリタニカ、開高健賞・正賞）、近著に『新脱亜論』（文春新書）など。